

VI 平和な高知県をめざして

(1) 新しい県づくり

南海大地震の被害

区分	被害
死者	679 人
負傷者	1,836 人
家屋倒壊	5,048 戸
" 半壊	9,906 戸
" 流出	566 戸
" 浸水	7,013 戸
" 焼失	196 戸
田畑浸水	3,000 町歩
漁船流出	2,398 隻
被害総額	30億円

沢村武雄「日本の地震と津波」による

南海大地震 苦しい戦後の生活を送っていた高知県の人々に二重の苦しみをあたえたのが、1946（昭和21）年12月21日朝4時頃、突然おそった南海大地震です。四万十市中村の四万十川にかかる鉄橋はおち、土佐清水市では唐船島が隆起し、宇佐や須崎をはじめ沿岸は津波による被害を受けました。

高知市を中心とする県中央部は地盤が沈み長期間水びたしとなりました。地割れや家がたおれたりして大きな被害がでました。しかし、県民は気を落とさず、新しい高知をつくるために元気に立ち上がったのです。

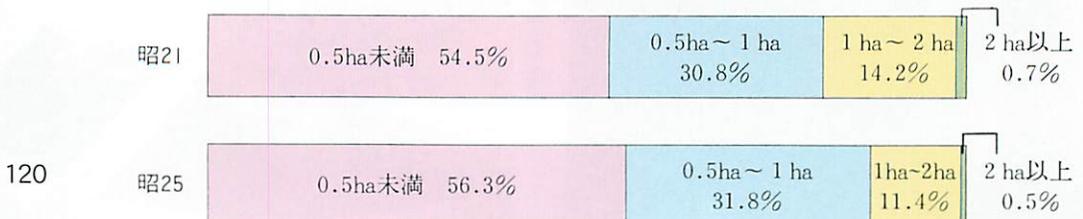
小作農から自作農へ 戦前、県内では小作農家と地主との争議が大きな社会問題となっていました。これをいっきよに解決したのは、戦後、連合軍のさしずによって行われた農地改革でした。

地震でひびわれた倉の土台

南海大地震のため藤本さんの家の倉は東側へ10cm程度ずれ、土台の石もひびわれた。当時の様子が今もうかがえる。



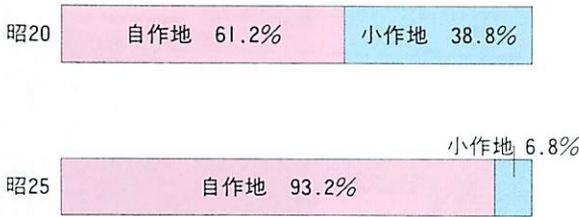
小規模経営農家の増加



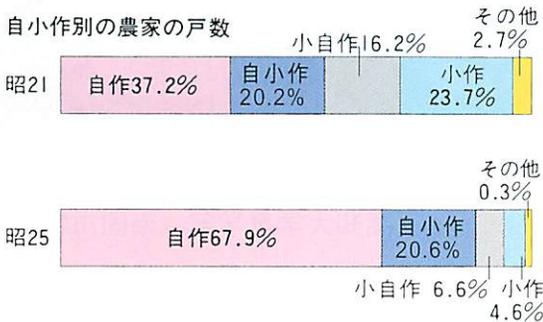
「高知県農地改革史」による

自作地・自作農の増加

耕地面積



自小作別の農家の戸数



「高知県農地改革史」による

農地改革は、それまで地主の持っていた土地を安いねだんで小作人に引きわたし、農村を民主化し、農業生産の力を強めるというねらいで行われました。高知県では2万5,500haの小作地のうち、1万5,500haの農地が自作地となりました。ほとんどの農家が自作農になりました。そのため、農家は米作りに力を入れるようになり、食糧不足の解決

に大きな役わりをはたしました。

しかし、安いねだんで農地をゆずりわたさねばならなくなった地主と、小作の人々との争いやもめごとたくさんありました。

このことは、それだけ改革が急であったことと、戦後の復興が、人々のぎせいや協力によってなされたことを物語るものといえます。

新しい教育 1947（昭和22）年、前の年に制定された新憲法を受けて教育基本法が作られました。戦争の反省のもとに、個人を尊ぶことや、教育に対する政治の不当な介入禁止などを定めました。県下の406校の国民学校は小学校と改められ、「民主教育の向上と発展のために」と高知県教育委員会がもうけられました。「教え子を再び戦場に送らない」の誓いのもとに教職員組合も活動をはじめました。

大学をつくる運動も県や民間が協力しあってすすめられました。その熱意が通じ、1949（昭和24）年3月、現在の高知大学がうまれま



高知大学医学部（南国市岡豊町）

した。南国市には農学部がおかれました。「地方における女子教育の向上が日本の婦人の地位向上につながる」という意見の中で高知女子大学も同じ年に開校しました。働いている人で、こうがく向学心の強い人のために1952（昭和27）年、県立高知短期大学もうまれました。南国市岡豊町にある高知医科大学は、高知大学医学部と名称が変わりました。

また、1997（平成9）年、高知工科大学が香美市土佐山田町にできました。現在県下には、高知学園短期大学をふくむ7つの大学があり充実したものになっています。

高知大学農学部（南国市物部）



高知工科大学（香美市土佐山田町片地）

